

マタイによる福音書

～「インマヌエル」(神はわたしたちとともにおられる)

司祭 ヨハネ 井田 泉

キリスト教の正典とされている新約聖書は全部で27巻の書物からなります。そのうちの最初の6巻(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、使徒言行録、ローマの信徒への手紙)を、一つずつ、およそ1年をかけてお話ししようというのがこのたびの企画です。

多くの場合こういう講座というのは、各書物の成立、構成、著者と最初の読者、特徴、思想などを、あるまとまった仕方で述べていくものだと思うのですが、今回私が話したいのはそういうものではありません。少々バランスを欠いたとしても、この書物の特徴はこうだ、と私なりに大胆に把握してお話することにします。

イエス・キリストの生涯を伝えてくれているのは、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書です。その最初に置かれた「マタイによる福音書」を、私は「**インマヌエルの福音書**」と呼びたいと思います。福音書の最初と最後に「神はわたしたちと共におられる(インマヌエル)」「わたしはあなたがたと共にいる」という言葉があり、その約束がこの福音書全体を包んでいる、と思えるからです。——これがすでに結論です。

1. イエス・キリストの系図

1:1「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。」

マタイによる福音書の冒頭に置かれた系図には意味があります。一般に系図というのは、自分がいかに立派な血筋を引いているかを示す、という意味を持っています。イエス・キリストの系図も一見そのように見えるのですが、詳しく見ていくとまったく違う意味がここには込められているのに気づきます。

1:6「エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、」

イエスの先祖とされるイスラエルの王ダビデ。その立派な業績ではなく、ダビデの恐ろしい犯罪がここに書き込まれているのです。ダビデは、自分の忠実な家臣ウリヤの妻を奪い、そのことが露見するのを恐れて策略をもってウリヤを戦死させた——このダビデの悪事を、福音書記者マタイはイエス・キリストの系図の中に書き込んでいる。つまり、忌まわしい罪、嘆きの歴史がイエスにつながっている。人の歴史の罪、欲望、嘆き、争い、祈りの世界のまっただ中に、イエスが来られて、それを引き受けて行かれる、というのがこの系図の意味だと思うのです。

2. その名はインマヌエル

1:23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

マタイ福音書の最初の物語はクリスマスの物語。それもマリアではなく、イエスの父となるヨセフの物語です。ヨセフは、婚約者マリアが自分の知らぬまに身ごもったことを知り、苦しみ迷いました。その末に離縁を決意しました。ところがヨセフの夢に天使が現れて言いました。

「1:20 ダビデの子ヨセフ、恐れずあなたの [ギリシア語原文] 妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

23 『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』

この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」

ここで天使がヨセフに告げたのは、700年以上も昔、預言者イザヤが語った言葉です（イザヤ書 7:14）。

『神は我々と共におられる』——そのことが、やがてマリアから生まれる子どもイエスによって実現する。インマヌエル——神が我々と共におられる。イエスがその事実を持って来られるのです。やがて人々はイエスをとおして神の声を聞き、イエスのそばにいて神と共にいることを経験する。

ヨセフは、主の天使が命じたとおりにマリアを妻として受け入れ、やがて生まれる子どもイエスを自分の子として受け入れる決意をしました。ヨセフは自分の疑い、苦しみ、葛藤を経験しつつ、彼自身がインマヌエル（神がわたしたちと共にいる）という事実を経験した。神がヨセフと共にいられたので、彼は妻マリアと共に人生の危機を乗り越えることができたのです。

インマヌエルのもたらす救いはマリア、ヨセフ、また当時の人々だけではなく、わたしたちにも及びます。「神はわたしたちと共にいる」。この事実を頼みとして生きていくのがキリスト教です。

3. 幸いの呼びかけ——山上の説教から 1

イエスは 30 歳のとき、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受け、そして 40 日 40 夜荒野で断食し、悪魔の誘惑を受けてこれに打ち勝ち、そこから人々の前で公に活動を開始されました。最初の弟子となったのは多くがガリラヤ湖の漁師で、その中にはペテロ（ペトロ）、アンデレ、ヤコブ、ヨハネといった人たちがいます。

マタイによる福音書の中には「山上の説教（垂訓）」という言葉で知られるまとまった箇所が

あります。5～7章です。

5:8 「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。」

5:9 「平和を実現する人々は、幸いである、／その人たちは神の子と呼ばれる。」

5:10 「義のために迫害される人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。」

ここにはイエスの招きがあり、励ましがあります。困難があっても平和のために働こう。辛いことがあっても正しいことと間違っただけを見分けて、しっかり歩もう。

イエスに招かれてその道を歩む、あるいはイエスの精神にならって生きようとする中で、自分の身に困難が降りかかることがあるかもしれない。その困難と苦しみの中でこそ、わたしたちはイエスと深く結びつき、神がわたしたちと共におられる（インマヌエル）ということを経験していくのです。

4. 主の祈り——山上の説教から2

「6:8 あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。9 だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。10 御国が来ますように。』

これは、イエスが弟子たちにこう祈るように教えられた祈りで、2000年の間教会はこれを祈り続けてきました。わたしたちの教会でも礼拝のたびに、集まるたびにこれを一緒に祈ります。

イエスご自身の祈りをわたしたちも一緒に祈るのが主の祈りです。「主」とは「主イエス」のことで、イエスご自身が祈っておられた祈り、それを弟子たちと一緒に祈るように教えられた祈りです。先にイエスが祈っておられて、その祈りの中にわたしたちも参加して祈るのです。

祈りは独り言ではなく、神への呼びかけです。

「御国が来ますように」「御」とは神さまを敬って言うキリスト教用語です。

新約聖書はもともとギリシア語で書かれました。その原文を見ると「あなたの国」と書いてあります。神さま、あなたの国が来ますように。地上にはひどいこと、耐えがたいことがいっぱいある。しかしこの地上にあなたの国が来るように。わずかであっても部分的であっても、神の愛と平和と正義が実現しますように、という祈りです。言わば天国を引き寄せる祈りです。

この礼拝堂をご覧ください。柱と梁で十字をなしています。真ん中の十字架がイエス。その左右にも十字架があって、両手をつないでいるように見えないでしょうか。左右の壁にも、ずっと後ろにも人がつながっています。わたしたちが礼拝堂に入る前に、イエスが祈っておられ、イエスと一緒に多くの人が祈っている。そこに来てわたしたちも一緒に祈る。——そんなふうになんか感じています。

5. わたしたちの病を担うイエス

「8:16 夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た。イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた。17 それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

『彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った。』

ここでマタイによる福音書記者は、イエスの癒しの業を単なる医療行為とせず、旧約聖書イザヤ書を引用してそこに起こっている事実の意味を語っています。

『彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った。』

これは旧約聖書・イザヤ書 53:4 の引用で、「主の僕の歌」と呼ばれる箇所の一節です。

イエスが人々を苦しめている悪しき力を追い出し、病を癒されたのは、実は人の病と重荷をご自分に引き受けられたのだ、というのです。マタイ福音書はイエスの超能力を語りたいのではありません。イエスは、深く人々の重荷、病、苦しみをご自分のものとしてその心と身に負われた。わたしたちの苦しみを本気でわかって、はらわたで感じて、それを引き受けてくださる。それがイエスです。これは十字架の意味につながります。

次のような言葉を皆さまはよくご存じかもしれません。

「11:28 疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛(くびき)を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

イエスは疲れたわたしたちを招き、ご自身のもとにわたしたちを休ませてくださいます。労苦においてわたしたちはイエスと一つとされ、休息においてもわたしたちはイエスと一つになるのです。インマヌエルです。

ところで今日用いている聖書は日本聖書協会で出版している「新共同訳聖書」というものです。

今の第 11 章 28 節、「……だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」となっていますが、後半のところ原文を見ると、「わたしが」「あなたがたを」休ませてあげよう。「わたしが」「あなたがたを」休ませる。はっきり主語と目的語が書いてあります。ほかのだれでもない「わたしが」、ほかのだれでもない「あなたがた」を、とはっきり書いてあるので、ここは代名詞二つを省略せずに訳してほしかったと思います。

聖書を読むときのポイントのひとつは、主語をはっきり意識することです。聖書は一般的な教えや教訓を集めた書物ではなく、言わば生きた神と人間のドラマです。イエスが「わたしが」「あなたがた」と言われるとき、イエスが両手を差し出して人々に働きかけてこられる。そのドラマ

を見つめながら、いつの間にか自分がそのドラマの中に入れられている——聖書を読むことの楽しさのひとつはここにあります。

6. イエスのほかにはだれもいなかった

マタイによる福音書を大きく二つに分けるとすれば、その中央というか分水嶺は、第 16 章のペテロの信仰告白と第 17 章の山の上でのイエスの変容です。

ペテロがイエスに対して「あなたはメシア、生ける神の子です」(16:16) と信仰の告白をした後、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れて高い山に登られました。三人は山の上で、イエスの姿が変わってその顔が光り輝くのを見ました。すると遠い昔の指導者モーセとエリヤが現れて、イエスと語り合っていました。やがて光輝く雲が彼らを覆いました。すると雲の中から声が聞こえました。神の声です。

「17:5 これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」

6 弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。7 イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。『起きなさい。恐れることはない。』8 彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。」

ここで 3 人の弟子たちは何を認識したか。

「彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。」

ただイエスが共におられることを認識したのです。遠い過去の聖書の人物を今によみがえらせるイエス。神の声を聞かせるイエス。そしてひれ伏し恐れる弟子たちに近づいて、手を触れ（タッチ）られるイエス。「起きなさい。恐れることはない」と呼びかけ励まされるイエス。このイエスが共におられるのです。インマヌエル！ 何を恐れることがあるのでしょうか。

「イエスのほかにはだれもいなかった。」

ほかならぬイエスだけを見た！ このイエスを見て、このイエスを信じて、このイエスについて山を下りて行きます。

7. 主の晩餐

ここで一気にとばします。多くの人々に愛され慕われたイエスですが、その存在と影響力を恐れた権威を持つ者、力を持つ者たちは、計略を用いてイエスを殺そうとしていました。イエスは自分に死が迫っていることを感じ、エルサレムのある家に最後の食事を用意されました。木曜日の夕の食卓。いわゆる最後の晩餐です。

「26:26 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。『取って食べなさい。これはわたしの体である。』

27 また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。
28 これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。29
言っておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実か
ら作ったものを飲むことは決してあるまい。』30 一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山
へ出かけた。」

この最後の食卓を再現するのがわたしたちの教会の一番重要な礼拝で、聖餐式という礼拝です。
カトリックで言う「ミサ」です。毎週日曜日の午前に行っています。前にあるのが「聖卓」と呼
んでいる大切なテーブルです。ここでパンを分かち合って食べ、ぶどう酒を杯に用意して共にい
ただきます。これは信徒にとっては何ものにも代えがたい祝福、キリストの命なのです。

8. 十字架

26 章から 27 章にかけておよそ 8 頁、イエスの受難物語が続きます。

その一部を朗読してみます。

「27:37 イエスの頭の上には、『これはユダヤ人の王イエスである』と書いた罪状書きを掲げ
た。38 折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけら
れていた。39 そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、40 言った。
『神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降り
て来い。』

41 同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。

42 『他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるが
いい。そうすれば、信じてやろう。43 神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救って
もらえ。“わたしは神の子だ”と言っていたのだから。』 44 一緒に十字架につけられた強盗
たちも、同じようにイエスをののしった。

◆イエスの死

45 さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。46 三時ごろ、イエスは
大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしを
お見捨てになったのですか」という意味である。47 そこに居合わせた人々のうちには、これ
を聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。48 そのうちの一人が、すぐに走り
寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。49
ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうかわからない、見ていよう」と言った。50
しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。」

福音書の中には「教え」や「譬え話」なども多く含まれています。それぞれが重要なのですが、大きく見ればこれは物語です。物語の中心に「出来事」があります。その出来事に触れた人々の経験があり、そこに深い意味を感じた人々がそれを言い伝え、やがて文字としてまとめられました。そこにはまとめた人の編集の手が加わっているのはもちろんです。けれども福音書を読むとき、最初に出来事を経験した人々の衝撃、驚き、感動、疑問……に近づいてみたい。すぐに意味を決めたり解釈したりするよりも、何が起こったか、人々は何に出会い何を感じたかが大切です。

とはいえ、私は、十字架の上でのイエスの言葉について、ひとつ解釈を述べておきます。

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

なぜ神の子、救い主がこのようなことを言ったのか。信仰につまずきを与えかねない言葉です。従容^{しょうよう}と死に就くのではなく、苦しみの中で絶叫して果てる。全然立派ではない。悟ってはいないような姿です。

しかし私はこれが大事だと思うのです。イエスは、言わば神と人のすべてから捨てられた場所に身を置き、そこから神と呼ばれた。捨てられた人間の救われがたい場所から神を呼び、神をつかんで離さない。このようにして、救われがたい人間のために神を獲得してくださった——これが私の理解です。正しいかどうかはわかりません。

イエスが叫んで死なれたことによって、私が死ぬとき、たとえ落ち着いた死に方をしなくても、死を受け入れられない無様な死に方をしたとしてもかまわない。そのようなわたしもイエスの死の中に受け入れられていると思うからです。

9. 復活

最後の晩餐が木曜日、イエスが十字架に付けられたのが金曜日。土曜日において日曜日の朝早く。十字架に続くイエスの復活物語が 28 章に語られます。

週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、イエスの墓を見に行きました。墓の入り口を塞いでいた大きな石は転がされて、天使が二人のマリアに言います。

「28:5 天使は婦人たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、6 あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。7 それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。“あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。” 確かに、あなたがたに伝えました。』

8 婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。9 すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われたので、婦人たち

は 近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。

10 イエスは言われた。『恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。』

天使の言葉を聞いて、喜びと半信半疑とで、ともかくも仲間の弟子たちに知らせようと走って行く二人のマリア。その二人を、イエスのほうが待っていて、彼女たちに声をかけられます。

「おはよう！」

これが福音書です。復活についての説明や議論はしない。ただ物語を伝える。

死んだイエスの復活。復活のイエスとの出会い——このようなあり得ない、考えられない出来事が記されています。

しかしこの二人のマリアに声をかけたイエスが、聖書から、聖書を超えてわたしたちに声をかけてくる。聖書を読む、聖書と取り組むわたしたちのほうが言わば主体であったのが逆になって、イエスのほうがわたしたちに呼びかけてきてわたしたちの人生と関わってこられる。聖書を読むのなら、ここまで行きたいものです。

10. いつもあなたがたと共にいる

マタイによる福音書は、次のような復活のイエスの弟子たちに対する言葉で締めくくられます。

「28:18 イエスは、近寄って来て言われた。『わたしは天と地の一切の権能を授かっている。19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。』」

マタイによる福音書の最後に「インマヌエル」が記されています。「神はあなたがたと共におられる」で始まったマタイによる福音書は、「わたしがいつもあなたがたと共にいる」というイエスの約束で閉じられます。

イエスの弟子となり、イエスから教えられ、イエスに守られ導かれること、そしてイエスの願い（神の国）を広げる働きに参加することは最高の幸せです。このイエスがわたしたちと共におられるという約束が、わたしたちを支えてくれます。